

Title	宗教改革に対する史觀の變遷(上)
Sub Title	
Author	有賀, 春雄(Ariga, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.1 (1930. 3) ,p.103- 126
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300300-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宗教改革に対する史觀の變遷（上）

ブリザード・スミスの著、『宗教改革時代』（本誌第一卷第三號大正十一年五月發行の書評欄参照）の終末の一章をなす。The Reformation Interpreted は十六・七世紀以來の諸大家に依つてなされたる宗教改革史觀を集めて、これを綜合した一種の宗教改革思想史ともいふべきものである。本稿はその翻譯である。

從來宗教改革を論じた歴史家は、彼等の國民的或は信仰上の傾向に依り、又は彼等の科學的方法に依り、或は又彼等の文學的作品に準據するなど、之を種々なる方法で分類することが出来る。されど吾人は今便宜上、彼等の史觀に基いて、四個の主なる思想系統に分類しようと思ふ。然し之に對するより適切な名稱が存しないので、余は假に之を宗教的政治的、合理論的、自由・浪漫的、經濟的、進化論的、と呼ばう。人事の凡ゆる範疇が然

る如く、斯かる分類は大略的のものであつて、大概の歴史家とまでは言ひ得ずとも、多くの史家は、一つ以上の思想型式に依つて影響されて居る。また諸種の歴史哲學が同時に存する場合には折衷主義が生ずる。宗教的政治的解釋は十六・七世紀を以て頂上としたが、其後にも餘命を保ち、合理論的批判は主として十八世紀に顯著であつたが、或る場合には十九世紀にも繼續し、自由・浪漫的學派は佛蘭西革命と共に起り、一八五九年頃に於て、第二位に下り、經濟學者や進化論者がその學說を主張し始めたのである。

一、宗教的及び政治的解釋

（十六・七世紀）

初期新教徒　宗教改革に對する新教徒初期の學說は、聖書の類推に基いた單純なものであつた。彼等に依れば、神は特定の人々を選んで彼に仕へしめ、神は、彼等を教化し指導せんが爲に、殊に彼等の常住背き勝なることを考慮して、豫言者や使徒や殉教者など夥多の事實の證人を順次に出した。

舊約時代に於て猶太人に與へられた神の惠は、新約に於ては教會の手に移され、そして此の神の恵は、正統教會の偶然にも特別な記者で歴史家である人が所屬したその一派に限られてゐた。

「宗教改革」の名稱　「宗教改革」といふ言葉は、特に此の言葉が用ひられた運動よりも遙かに古いもの

であつて、その指導者達が斯くあるべしと欲した所のものを正確に指示してゐる。「改革」とは人類の永久的標語であつた。この語は中世に於てはリエンチ（Rienzi）の如き夥多の指導者に依つて行はれた事業に適用せられ、コンスタンツやバーゼルの宗教會議の綱領に採用された。夙にルーテルは一五二八年ジヨージ公（Georg, Herzog von Sachsen）に贈つた書翰の中に、此の語を用ひて、「先

づ第一に靈俗兩界に共通なる改革が行はるべきである」と述べ、そして此の語を彼の最も偉大なる獨逸文小冊子の表題の中に加へた。また彼及びその友人等により彼等の團體に頻繁に適用せられた他の名稱は「福音」といふ語である。ルーテル自らの觀る所では、ウイッテンベルヒのこの教授（ルーテル）は久しく蔽はれて世に出なかつたイエス・パウロの福音を復活せしめる事をのみ爲しつゝあつたのである。リチャード・バートン（Richard Burton）は曰く、「ルーテルは突如として迷信の濃霧を一掃して原始教會の眞髓を復活しようとしたのである」と。

初期新教徒は、一切の事物を神の總本的攝理に歸し、さうして時には之を神の直接行動なりとし、或は不都合な、而も執念深い惡魔の仕業であるとした。この實例を示す引用句を手當り次第増加することは容易であるが、そは無益のことであらう。けれども彼等が自然的原因に全く盲目でなかつた事を注目することは興味深いことである。ルーテルは既に一五二三年頃に、彼の改革運動と學問

の復興との關係を理解し、後者を以てバブテスマのヨハネの如きが福音宣傳の素地を作つたことに比した。彼はまた、此の宗教改革運動は彼れ自らの直接參加に依從せる偶發的なものに非ずして必然的なものであり、彼が傳道に着手した時、既にその運動は進行中であつたことを理會したのであるけれども、彼れの後繼者達の多くは之を解しなかつた。彼は一五二九年に、「惡弊の矯正と抑壓とは余の教義が起る前既に充分に行はれてゐた：：：そして若しも確固たる教義が之に干與しなかつたならば、ミュンツェル（Münzer）の開始したる如き無秩序狂暴なる危険な革命が起りはせぬかといふ懸念が大であつた」と言つてゐる。

英國の新教派の歴史家は、「啓示全能」の學說を完全に採用しつゝも、第二義的な自然的原因に適當なる考慮を拂はんとする所が見える。即ちフォックス（Foxe）の如きは、法王權の顛覆されたことは大なる奇蹟であつて永久的な恵みであると主張し乍らも、それは印刷術の發明と不信心なる人文主義者の放つた「攻擊の第一矢」のために可能とな

つたものであることを認めた。バーネットは遙に勝れた著書に於てフォックスの議論を祖述した。彼は多くの文書を出版したが、彼も亦た敬神の爲には、新教徒に不利益を與へる事實を隠蔽するこゝが出來た。彼は彼の作った讚辭の爲に議會から感謝された。この書は、「宗教改革に於てなされたる第一步は、王位の權利とその臣下全體に對する全支配權を、御身の皇祖達に、復歸せしめるこゝであつた」といふ諂のまた誠心をこめた言葉を以て、チャールス二世に獻ぜられたのである。

之と同時代なる獨逸の新教徒の歴史家なるゼックンドルフ（Seckendorff）の任務は甚だしく困難であつた。彼れの告白する所によれば、三十年戦争は多くの人々をして宗教改革の利益を疑はしめ、その主義に不信を抱かしめ、又その教義を排斥せしめたからである。彼は非常に博學な著述に於て無駄な辯解の努力を拂つたが、この書は之に引用したる諸文書の爲に、特殊研究者にとつて今尙ほ價値がある。

れと全く相反すること、印章と封蠟との対立せるが如く、又は原板オガテーヴと寫眞との關係に於けるが如くであつて、一方に於て凸出せる所のものは他方に於ては凹み、一方に於て光明なるものは他方に於ては陰影である。かの選民と上帝の親政權と惡魔の介在とを説く同一の教義は兩者の基礎である。

ルーテルが夢魔から生れ惡魔に親しめる悪人であり背教者であつたことは彼の異端を説明するのであつて、一般に彼はマホメットやアリウスに比較されたのである。彼の行動に對しては屢々些細のものであつても悪い動機が見出された、例へば彼は法王から結婚の認可を得ることが出來なかつた爲羅馬から絶縁したる如きである。ルーテルが免罪符に反対したのは、その發賣を法王から委ねられてゐたドミニカン宗派のものに對する、オーガスチン派の嫉妬に依つて促されたものであるといふ傳説は一五一九年エムゼル(Emser)に始まり、その後、ピーター・マルチール(Peter Martyr d'Anghiera)に依り、コホレウス(Cochlaeus)に依り、ボショード(Bossuet)に依り又今日に至るまでの多くのカトリック教徒及び世俗の歴史家に依つて、繰り返されたのである。

ボショード 宗教改革の唯一の原因を單に墮落に外にしては、カトリック派が一七〇〇年以前に於て此の問題に關してなしたる顯著なる貢献はモー(Meaux)の司教、ボシュエーの說あるのみである。彼の著「新教々會變遷史」(Histoire des Variation des Eglises Protestantes)は、從來宗派的論爭の主要素となつてゐた惡またはしき個人攻撃をなげずして、而も眞に雄辯を以て著はれたが、この書は改革者自身の口を借りて彼等相互の矛盾を指摘して彼等を處斷し始めた。彼は曰ふ、眞理は一つであつて異説は眞理ではない、然るに新教徒は殆んど傳導師の數ほど異説を有する。先にも後にも未だ曾てカトリック教の立場から新教徒に對し斯くも効果ある論難はなされなかつた。彼は說得的な反復を以て新教を攻撃した。曰く、中心的權威が無ければ、宗教には何等確固たるものがない。叛亂は正に信仰上の無關心及び無

神論を導き、世俗社會の整然たる秩序を覆すものである。又、宗教改革の主因は教會の明白なる墮落と改革者の個人的憎惡に起因するものであるとせられた。併してまたルーテルの一夫多妻論、ツヴィングリの原罪否定論及び異教徒と雖も善良なる者は天國に入るを得るといふ奔放な議論の如きは、その結果社會秩序を紊すべきものであると主張された。

世俗的歴史家 此の時代には、宗教改革に關して餘り信仰に偏してゐないものが多く書かれた。最も自由な傾向の人々の議論が、最も信仰深い人々のそれと殆ど同一である事實は、彼等が如何に完全に環境の影響を受けたかを示すものである。世俗的歴史家は概して宗教史を特別な學問として等閑に附した。代表的な新教徒の歴史家エドワード・ホール(Edward Hall)は餘り宗教方面に觸れてゐない。カムデン(Camden)は彼が歴史家に適當な問題であると考へた政争や戦争の方面を脱して、少しく宗教史に觸れたことを辯解してゐる。ブ坎ナ(Buchanan)は宗教改革を閑却して居り、ド・ツ

ー(De Thou)もカトリック教徒或はユグノート派の攻撃を受けることを懼れて、簡単に數言の中に之を片附けてゐる。ジョヴィウス(Jovius)は彼の全著述を通じて、宗教改革に就て一、二頁を費したのみである。彼は或る場所で、宗教改革の主なる原因を星が悪く交會した爲なりとなし、又他の場所で、それはコンスタンツに於て邪教と宣せられた古い異教の復活であるといふ。ポリドア・ヴァージル(Polydore Vergil)も教會の分裂には餘り注意を拂はず、その原因を人心の薄弱なるとその新奇を好む傾向にありとしてゐる。

此の時代に宗教改革の興起に關して世俗的歴史家の爲したる一つの價値ある解釋は、之を主として政治的現象なりと解する説である。此の解釋に多くの眞理の存する事は明白であるが、然しそれは餘りに誇張に過ぎ餘りに表面的である所に不安がある。宗教改革が如何に深くその時代の政治的必要に訴へたかは十九世紀に至つて初めて明らかにせられたものであつて、宗教方面と政治方面的此の二つの革命が如何に微妙に又如何に無意識に

働き合つたかは、此の時代の最も聰明なる人と雖も會得し得なかつた處である。即ち彼等の爲したる政治的解釋とは、只君主や或る徒黨が利己目的を達せんが爲に、その名を宗教に藉りたと説明するに過ぎない。此の説にも多少の眞理は存するけれども尙ほ大方の眞相を傳へたといふことは出来ない。

ギッチャルチニ ヴェットリ (Vettori) がその「伊太利史」(History of Italy) に於てルーテルを擧げたるは皇帝が法王に對して如何に彼を走狗として使驅したかを只管示すが爲であつた。またギッチャルチニ (Guiccialdini) は、宗教改革は獨逸人が免罪符の爲に金錢を投することを憤慨した爲であると説明した。彼は曰ふ、此の出發點は眞面目であり、少くともそれには許さるべき理由あるものであつたが、ルーテルは彼の野心と世人の稱讃とに驅られて進んで一派を打ち立てたのである。若し此の叛亂を法王が捨て、顧みなかつたならば、自ら鎮るべきであつたものを、法王は誤れる道を踏んでそれに反対した爲に、微少な閃光は遂に大なる

火炎と化したのであると。

多くの佛蘭西の著者は次の如く言つてゐる。ブラントーム (Brantôme) は、宗教上の議論は、彼よりも之に通曉せる人に任せると言つてゐるが、然し彼は、「一國民の中に於ける新宗教の發生は、後ち政府の變更を要求する」といふ理由を以て、改革を危險であると考へた。彼は又、ルーテルは僧侶に妻帶を許して彼等の多くに對して信用を博したこと考へた。マルタン・デュ・メレ (Martin du Bellay) は英國の分離の原因を、ヘンリーの離婚及び彼の尊嚴に對して法王が敬意を表することの薄かつた事に見出した。ダヴィラ (Davila)、ド・メゼレー (de Mézeray) 及びダニエル (Daniel) の三人は佛蘭西の内亂史を叙して、ユグノー派を單なる政治的黨派として扱つた。彼等は、なる程政治的黨派ではあつたが、然しそれ以上の意義があつた。フーゴー・グロチウス (Hugo Grotius) すらも和蘭の叛亂及び宗教革命に就いて一層深刻な原因を傳へることは出來なかつた。

に出たものが少くとも二世紀の間は最も勝れたものであつた。スライダン(Sleidan)は或る特殊な方面に關しては他の人々に凌駕されるとしても、公平、正確、博學、叙述の練達など大歴史家たるの諸要素を一身に具備して居り、此の點では十六・十七世紀に教會史に關して多くを記述した何人にも勝つてゐる。彼は新教徒ではあつたが、ランケの標語を想記するやうな言葉を以て、須らく公平なるべきを主張し、「凡てを在りのまゝに」(rem totam sicut est acta) 記述すべきを提言してゐる。又彼は、「宗教的事件を叙述するに私は政治を度外視しては不可能であつた、蓋し既述の如く宗教と政治とは常に密接なる關係を有するが故である、殊に現代に於ては兩者を切り離すことは出來ない」と言ひ、更に彼は、宗教改革を以て聖書の大勝利なりとし、ルーテルを以て眞正の宗教の大選手であるとする。また彼は哲學的思索を多く用ひずして、直截簡明なる記述を以て此の運動の外交方面及び神學的方面を——無上によく——記述したが、その原因を訊ね究めることなく、又この運動の他の

全方面的根據と爲れる民衆の支持に就いて探索しなかつたのは不備である。

サルピ スライダンが爲したるよりも一層巧妙にして一層深い心理的洞察が、「トリエント宗教會議の大解剖者」(the great unmasker of the Tridentine Council) ミルトンに適評されたパウル・サルピ(Poul Sarpi)の著述に發見される。その著述が新教の地方に於てのみ出版することの出来る此の修道僧、マコーレーに依つて近世の第一人者と稱讃せられ、アクトンに依つてニューゲートの牢獄に相應であるとコキ卸された此の歴史家は、一つの最も奇異なる心理的難問を研究者に提出した譯である。彼の學識と正確さは近年大いに難癖をつけられ、恐らく信用を失つたやうであるが、それに関する議論は兎に角、彼の此の主題に對する態度如何を調べてみやう。彼を、新教の或は、カトリック教の辯護者又は合理論者の何れとも決することは困難である。彼が己の奉ずるカトリックの教義を攻撃し、彼が當然呪詛すべき異教徒の行為に好意を示してゐる點よりすれば、恐らく彼を

以てカトリック教の改革家と爲すことは最も適當なる解釋といふべきであつて、彼は教會の政治的紛擾に立入ることは好まなかつたが、教會を廓清せんことを熱望した人であつた。従つて彼をより自由な時代に於て彼等自からの教會に對して苛酷な告訴狀を書けるハドリアヌス六世 (Adrian VI) 及びコンタリニ (Contarini) に比することは敢て不自然に非ず、又デリンガー (Döllinger) に於て彼に類する所を見出すも然るべきである。彼の性癖が如何なるものなるにせよ、彼も明らかに彼の時代の限界以内に止まるものであつて、彼が主眼とする論題の序説として詳細なる歴史を書いた新教革命の記述も、既に全く先人の說いた所に外ならなかつた。即ち宗教改革は神の意志であつて、教會の惡弊に依りまたオーガスチン及びドミニカン兩派の修道僧の嫉妬によつて惹起せられたものであるとするのである。

リング頓 (Washington) の「オセアナ」 (Oceana) に於て發見される。ハリントンは、ヘンリー八世が修道院と貴族から沒收した土地を民衆の手に移した時に、彼は憲法上從來の權力の均衡を破り、封建制度と教會とを破壊して、皇位に一層危險なる敵を齎らしたと考えたのである。

一一、合理論的批判 (十八世紀)

宗教改革に對して世俗的な立場から判断を下したのは、勿論啓蒙『哲學者』を以て最初とするものではないが、然し彼等の歴史觀は、人文主義者に比して大なる進歩を示してゐる。即ち人文主義者は宗教改革の全運動を以て、打算的な洗練された政策に依つて促された妄想もしくは欺瞞に過ぎないと解し得たのみであるが、之に對して十八世紀の哲學者等は、より深い觀察をなしてゐる。然しそれにとつても宗教は虛偽なるものであつて、ヴォルテールの言へる如くんば、宗教は最初の惡魔が最初の愚者に出遭つた時に起因するものである。けれども彼等は宗教上の變更を明らかにし、有益

なる類似を指摘することが出来た。

モンテスキュー モンテスキューは、宗教はその信者の要求に應じたものであつて、斯くて信者に依つて其の時代の社會組織に適合せしめられたものであることを述べた。彼は回教と基督教とを比較した後に、ヨーロッパのアルプスの北部は一般に獨立の精神に富めるが故に新教を採用したが、それに對して、自然從屬的なる性質を有する南部は依然として權威あるカトリック教に執着したと述べてゐる。又新教の中の分派も彼等の政治團體に對応するものであつて、それが起つた事情に依つて、ルーテル派は專制的となり、カルヴァイン派は共和的となつたと彼はいふ。又、新教諸國に於て教會の祝日を廢止した理由は、北方に於ては勞働が一層必要であり、その興味も一層深い爲であると彼は考へた。又、新教が多くの自由思想家を輩出せしめたといふ上記の事實は、その素撲な禮拜は自然カトリック教の官能的な儀禮に比して、暖か味の乏しい故であると彼は説明するのである。

ヴォルテール ヴォルテールは最も偉大なる歴史家

の一人である。彼の如く、世界の各地に亘つて、生活の各方面を觀察し、殆ど宇内史に近いものを完成した者は一人もない。如何なる權威も彼を欺くことは出來なかつた。又、如何なる事實と雖も自然の法則に依つて解決されないものはなかつた。彼は非常に博學ではなかつたこと、また彼がカトリック教を以て、「古來人間を野蠻ならしめたる最も憎惡すべき迷信」と稱し、之に對して強い偏見を持つてゐたことは事實である。然しそれにも拘らず、人類史上に自由と生命とを與へたことを先人の何人よりも勝るのである。

彼の宗教改革史は、ボシェエー、サルビ及びその他數種の一般的著作に準據したものであるが、然し少しも史料を熟讀した形跡はない。然かも彼の宗教改革批判は驚くべきものである。彼はルネサンスの偉大さ、その發見、その盛況、その偉大な人物の目録等の熱心なる説明に始まり、進んで、宗教改革をば一つはアフリカ他はペルシャに時を同うじて起つた二個の回教の宗教革命と比較してゐる。彼は深く探索しはしなかつたが、宗

教の斯の如き比較的考察は、曾て何人も考へることすらもしなかつた所である。又彼は一つの事件の経過を辿る場合に、大なる結果に對して寧ろ小なる原因を見出すといふ常套的な方法を探つた。

即ち彼は、凡ての事實は免罪符販賣の利得に關するオーガスチン派とドミニカン派の論争に發するを確言し、「サクソニーの一角に起つた、律僧の此の小さな論争が、やがて三十ヶ國の國民に百年以上上の軋轢、憤怒及び不幸を齎らした」といひ、「英・國が法王の治下を脱したのは、ヘンリー王が戀に陥つたことに依る」と述べ、更に、瑞西人はエッ

「カ」と彼は言葉巧に評した。モンテスキューの影響は、「哲學辭典」の中に於ける初期の經濟的解釋の中に見出される。

國民によつては、その宗教が、氣候や政治の結果でないものがある。如何なる理由が北獨逸、丁抹、瑞西の大部分、和蘭、英蘭、蘇格蘭、及び愛蘭(呵々)をローマ教會から分離せしめたか。そは貧困の爲である。即ち、免罪符は……餘りに高價に賣られた、管長や律僧は地方の全收入を獨占した。斯くて民衆は費え少なき宗教を選んだのである。

蘇格蘭の歴史家 ヴォルテールの學說を忠實に踏襲亂を起したと論ずる。ヴォルテールの説に於ては、宗教改革は、それが流血を見、暴民の激情に訴へたが故に非難されてゐる。改革家の教義は、その反對派の教義よりも決して合理的ではないといひ、只、ツヴィングリのみは、「基督教に對してよりも、自由に對して、より熱心であるやうに思はれる」といふ理由で稱揚されてゐる。「勿論彼も謬つてゐる。然も斯く謬ることは如何にも人間的ではない

ロバートソン ロバートソン(William Robertson)は長老教會派の僧侶であつたが、「宗教の幸福なる改革」は、「基督教の出現以來の最も大にして又最

も恩慈的なる革命を、人間の精神上に及ぼした」と考へた。彼の意見に依れば、斯の如き作用を論ずる場合に、「歴史家たる者は、神の攝理に歸せられる迷信や輕信に最も迷はされざる者である。」即ちこの神の攝理は、特別に準備せられたる自然の原因に依つて行はれたのであつて、此の自然的原因の中に、彼は、十四世紀に於ける教會の長い分裂、アレキサンダー六世及びユリウス二世の法王職、免稅と重稅に伴ふ僧侶の墮落と富裕、印刷術の發明、學問の復興、そして最後に、重要なのはロバートソンの判断に依ればカトリック教の教義の聖書に悖ることの事實等を數へてゐる。斯くて彼は、寛大な心と、綜合の力と、眞に公正なる見識とを以て、宗教改革の経過を辿つた。彼はルーテルの暴舉を非難してゐるけれども、——今度は中流階級側の法律及び秩序の擁護者となれるルーテルが農民の暴動に對して斷然反対したるを稱讚してゐる。

ピューム ヒューム (David Hume) は史料の利用並にその論究の範圍に於てはロバートソンに劣る

が、超自然的なもの、魅力から完全に脱した點に於て、ロバートソンに勝つてゐる。彼は英國の宗教改革を論述するに、宗教上の教義の性質に對する解剖的批判を以て始めてゐるが、その論述は辛辣とはいはまでも嚴正である。彼の觀るところに依れば、僧侶は民衆の輕信や情熱につけ込み、謬見や迷信や妄想を眞理の蓄積とさへ混同することを以て、常にその利益を考へるのであるが、それは一體何故なるかを示してゐる。それ故、教會を政府の支配の下に置くことは、政治的權力の本務とする所である。此の政策たるや、實にあの當時羅馬教會が思想の自由を抑壓し、國家の意志に反して人類の上に蒙らしめた大なる禍に反対して起つたものであつて、勿論宗教改革の最大なる原因ではないが、一原因なのであつた。此の外の影響は、印刷術の發明、學問の復興、及び民衆の理性に訴へずしてその偏見に訴へたルーテル及びその徒黨の粗暴にして俗受けのする性質であつた。改革論者は彼等が常に民衆自身の爲を考慮していることを民衆に欺き信ぜしめて彼等の支持を得、

そして主權にとりて不利なる教義を拒けて政府の支持を得た。信仰を以て義とせられる教義は、宗教を益々上帝の稱揚と信徒自からの謙讓とに傾かしめる所の一般的法則と調和するとヒュームは考へた。彼はトーリー黨ではあつたが、宗教改革の効果を以て、初めは正義の遂行に資せりとなしたが、後には、權威に反対し休止することなき精神を激發するが故に危險であると判断した。一つの悪い結果は、之が「是等の見苦しい形而上學的論文作成者即ち神學者達」を、曾て如何なる詩人も哲學者も達したことのない名譽の位置に高めたことであるといふ。

ギボン 十八世紀に出でたる最も價值あり最も公正なる宗教改革の評價は、エドワード・ギボンの大著「羅馬衰亡論」(The Decline and Fall of the Roman Empire)の中の此の問題に費したる數頁に見出される。彼は先づ曰く、「例へばツウングリ、ルーテル、カルヴィン等の」功績を評價する哲學者は、如何なる信仰箇條から、彼等は吾人の理性を超越して或は吾人の理性に逆つて基督教信者を

解放したかを慎重に問ふであらう。そして此の問題に答へるに當つて、哲學者は「最初の改革者等の自由なるに依つて反感を惹起させられるよりも、寧ろ彼等の怯懦に驚ろかされるであらう」。即ち彼等はあらゆる奇蹟を説ける感激的聖句、三位一體と神の化身の大秘儀、最初の四回乃至六回の宗教會議の神學、カトリック教を信じない者は凡て天罰を蒙ると説くアタナシウスの信條等を承認したのである。彼等は化體說(the article of transubstantiation)の理論を考究することなく、却つて自らの狐疑逡巡に當惑し、斯くてルーテルは聖晚餐に於ける基督の具體的出現を信じ、カルヴァンはその本質的出現を信じた。彼等は「多くの敬虔なる基督教信者が、神は暴虐にして氣まぐれなる專制君主であることをよりも、寧ろ聖餅が神なる事を容認する」が如き目的の爲に、「原罪や贖罪、誓約、冥加、及び宿命などの素晴らしい教義」を採用したのみならず、更にそれを改良し、それを世間的にしたのである。ギボンは續けて曰く、「然もルーテル及びその競爭者の貢献は堅實且つ重要であ

る。そして哲學者は是等の權威を物ともしない熱狂者に感謝せねばならぬ。免罪符の濫用から聖母の執成しに至るまで、宏大なる迷信の殿堂は、彼等の手によつて根柢から破壊された。修道院に屬する男女無數の僧職は社會生活の自由と勤勞に復歸せしめられた。」輕信はも早や偶像や聖寶等の日々の奇蹟の上には育たなかつた。「人間には最も價値あり、神に最も無價値でない」簡易な宗教が「異教の模倣」に取つて代つた。そして最後に權威の束縛は斷たれ、基督教信者は各聖書の解釋者を承認しないで、彼等自らの良心を頼るべきことを悟つた。斯くて此の事實は、宗教改革の目論見としてよりも、寧ろその結果として、信仰の自由、無關心、及び懷疑論を釀成した。

ヴィーラント(Wieland)は之に反して、宗教改革は哲學の進歩を數世紀間後らせた所の弊害であつたと卒直に論じて、ニーチェの議論を豫想させた。若しもルーテルが學者に委ねらるべき宗教上の論争に容喙して民衆を之に黨せしめることがなかつたならば、恐らく伊太利人は、有益なる合理

的改革を成し遂げたかも知れないと思はいふ。
ゲーテ ゲーテは或る時、ルーテル一派は平穩なる文化を驅逐したといひ、又或る時、宗教改革を評して、「謬信と謬信、私利と私利とが鬭争し、真理は僅かに此處彼處にしか見られない、限りなき混亂の慘ましき光景である」といひ、又、友人に送つた書翰に、「宗教改革に於て唯一の興味あるものは、ルーテルの性格である。且つ又彼の性格こそは人々に感銘を與へた唯一のものである。その他ものは凡て、吾人が自己の費用を以て未だ片づけることの出來ない奇異なる廢物の堆積である」と述べてゐる。然し、彼のエッケルマンとの對話の言葉を信じ得るならば、彼はその長い生涯の晩年に於いて、此の説を幾分改めたものと思はれる。即ち彼は若い門弟に、世人は、斷乎として神の世界に立脚するの勇氣を與へられたルーテルに對し、そのうけたる甚大なる恩恵を悟らなかつたと告げた。

レッシング 此の問題に對する獨逸の新教徒の論述は、敬虔主義(Pietism)及び啓蒙主義(Enlighten-

ment) の影響をうけて著しい變化を來した。恰も初期のカトリック教學派が、ルーテルの狹量を過分に誇張し、そして、宗教改革は弊害を齎らした外には、何ものとも改めなかつたことを證するのに重きを置いた如く、今やその指導者の自由主義が大いに重要視せられた。レッシングが「ルーテルよ！ 汝は偉大な、されど誤解せる人である。汝は傳統の桎梏から吾人を自由にした。然し一層堪え難い聖書の桎梏から、何人が吾人を解放するだらうか。今汝自らが教へんとするが如き、そして基督親らが教へんとした如き基督教を、遂に何人が吾人に齎らすであらうか」と、このヴィツテンベルヒの教授を頓呼したのは、初期新教徒の編執に鑑みての言葉である。

蘇格蘭人なるロバートソンには比敵すべくもないが、獨逸のロバートソンとも稱すべき人にモスハイム(Mosheim)とショミット(Schmidt)がある。共に新教の革命を全く必然的なものとして觀やうとする努力の下にその歴史を書いた。モスハイムに於ては、背景にではあるが尙ほ惡魔が表はれて

ゐる、が、ショミットに於ては當時獨逸の新教徒の能ふ限りの程度に合理的であり公平なのであつた。

三、自由浪漫的評論

(一七九四年頃より一八六〇年頃に至る)

十八世紀の末葉の頃に於ける修史は、主として三つの原因に依つて著しい變化を來した。第一は佛蘭西革命及び一七八九年以後凡そ一世紀に亘つた政治上の民主主義を確立せんがための紛糾であり、第一は浪漫的運動であり、第三は科學思想の勃興である。從つて宗教改革に對する解釋も一變して、十八世紀の寧ろ不利なる評決は完全に覆された。新教派の中、その最も極端なる黨與の者と雖も宗教改革運動の意義とその指導者の性格とを自由・浪漫派の論者の如くには高く評價しなかつた。實に此の時代の論評は信仰の新舊には關係がないルーテルの人物についての長所その事蹟に關する最も誇張されたる頌讚は、新教徒に依つて唱えられないで、却つてカトリック信者のデリンガーや猶太人のハイネ、自由思想家たるミシェレーやカ

ーライルやフルードに依つて爲されたのである。

佛蘭西革命

佛蘭西革命は人をして、歴史の全體

は、抑壓に對して自由を得んが爲の奮闘であるといふ考を抱かしめ、或は斯く解釋するやうに謬らしめた。從つて宗教改革も斯かる永久的鬪争の都合よき一實例であつて、佛蘭西革命よりも早い時代の革命であつた。さうしてルーテルは暴虐なる

壓政に對して、人間の權利を擁護する爲に立つた偉大なる解放者であつた。

コ・ペドルセーコンドルセーは「人間精神發展の歴史的概説」(Esquisse d'un tableau historique des Progrès de l'Esprit humain: 1794)なる立派な論文の中で宗教改革を論じたが、宗教改革と佛蘭西革命とを比較論述すること彼を以て嚆矢とする。此の論文は入獄中に起草せられ、遺稿として公にされたものである。彼は曰ふ、ルーテルは僧侶の罪惡を懲らし、一部の人々をして法王權の羈絆から脱せしめた。若しも宗教上の自由は政治上の釋放を齎すであらうと直覺的に感じて、此の反抗運動に結束して反対した諸君主の、謬つた政策が

なかつたならば、彼は凡ての人を自由にすることが出來てゐたであらうと。又彼は、此の時期は政府と政治學に勢力を加へ、又僧侶の獨身を廢して品行を正した、けれども、宗教改革は佛蘭西革命——言外の意味を汲め——の如く大なる殘虐のために汚點を印したと附言してゐる。

ヴィレー 一八〇二年に、佛蘭西學士院は、「ルーテルの宗教改革は、歐洲諸國の政治狀態及び文化の進歩の上に如何なる影響を及ぼせしか」の問題に對する懸賞論文を募集した。此の賞を克ち得たのはシャルル・ド・ヴィレー(Charles de Villers)であつた。彼は、人類の漸次的進歩は、一系列の革命——或るものは平和に行はれ、或るものは狂暴に行はれた——に依つて成し遂げられて來たのであつて、凡て是等の革命の發生は、宗教上の自由かつて、又は政治上の自由か、その何れかを達成することを目的としたといふ議論を、熱心に唱えてゐる。彼は宗教改革に對する意見を述べた後、宗教改革は宗教上の自由を打ち立て、政治上の自由を促し、又、彼れの欲する殆ど凡てのものを含む種々の幸

福を歐羅巴に賦與したものとして宗教改革を稱讚してゐる。斯くて彼の意見によれば、宗教改革は法王配下の收稅吏を遠ざけて、新教諸國をより富裕ならしめ、「權力の均衡といふ大思想」を起させしめ、更に一般的哲學的啓蒙に道を開いたのである。

ギゾー ギゾーに依つて、此のヴィレーヌ全く同一の議論が、より博學により慎重に主張されてゐる。即ち彼に依れば、

宗教改革は、その自由を確保せんが爲にされたる人類の一大努力であつて、そは歐羅巴が其の當時まで過去の手より受け、或は受くべく餘儀なくされて來た凡ゆる觀念や見解から脱して、自由に獨立に思考し判断せんとする新らしい要望であつた。それは人間の理性を解放し事物を凡てその正しき名稱を以て呼べんとする一大努力であつた。それは又、人間精神の精神界に於ける絶對的權力に對する反抗であつた。

浪漫的運動 しかし十九世紀の十六世紀に對する同情は、政治方面以上のものがあつた。十九世紀

に於けるルートル及び宗教改革に關し詩や美術や音樂を以て讚美せる多くの作品は、是等がその時代の精神に對し如何に快適であつたかを示す爲に作られたものであるとも言へる。ルートルの生涯を主題としたヴェルネル(Werner)の劇曲(一八〇五)、メンデルスゾーン(Mendelssohn)の『宗教改革交響樂』(一八三二—三)、マイエルベア(Meyerbeer)の歌劇『ユグノー』(一八三六)、及びカウルバッハ(Kaulbach)の繪畫『宗教改革時代』(一八四〇頃)、を擧げたゞけで充分である。實に宗教改革は情緒的、神祕的なる敬虔、古典的精神の限界を踏み出し、無限を求め、傳統的秩序や制度の束縛を輕蔑せんとする努力に出づる浪漫的な運動であつた。

スタエル夫人 以上は凡てスタエル夫人(Mme de Staël)の新教獨逸に對する熱心なる嘆賞の中に反映してゐる。夫人は獨逸に於て、反省や理想主義や確信の力に溢る人々を見出した。彼女は、ルートルの思想の革命を、自國(佛蘭西)の物質的でなくとも實際的な行爲の革命に比した。又彼女は、

獨逸人は政治問題から宗教を生活問題に引き戻しまたそれを打算的利益の領域から感情と精神の領域へ移したといつてゐる。

ハイネ 最も耀やかしい文章を以て述べられた殆ど同一の觀念はハイネ(Heine)の世人から餘りに閑却されてゐた獨逸の宗教及び哲學に關する概説に活氣を與へてゐる。彼は、獨逸文學に無理解な佛蘭西の民衆に對して、佛蘭西に於て文學の占むる位置はライン河の東方なる獨逸に於ては形而上學の占むる所であることを指摘し、而して曰く、ルーテルからカントに至るまで一つの一貫した思想の發展がある。そしてそれは精神的價値から言へば殆んど二つの革命に外ならない。ルーテルは時代の闘士であり代辯人であつた。彼は由來久しき暴政てふ檉の老樹を粉碎した暴風であつた。彼の聖歌は魂の鼓舞する行進曲であつた。彼は革命を起したが、それは平和的なものに非ずして、一種の「崇高なる殘虐性」を帶びたものであつた。彼はその民衆に言葉を與へ、カントは之に思想を與へた。ルーテルは法王を黜け、ロベスピエールは

國王を斬首し、カントは神を取除いた。之等は何れも名目こそ異れ、凡て同一の暴君に對する人間の叛亂であつたと說くのである。

ミシェレー 十九世紀中葉の大歴史家の大部分は、自由主義、浪漫主義、及びやがて述ぶべき科學主義の三影響の下に歴史を叙述した。それ等の歴史家中、最も偉大であるとは言へないまでも、最も親しみ深きは、ユグノー派家系より出でたる自由思想家たるジュール・ミシェレー(Jules Michelet)である。彼の佛蘭西史は、愛せられ崇拜せられる若干の傑人の傳記の如きものであつて、彼はその傑人の艱難に苦悶し、その勝利に欣喜してゐる。又彼は、彼が好意を寄すると否とに拘らず、凡ての偉人に對して、「貴下は民衆の爲に何をなせしや」といふたゞ一つの無遠慮なる質問を提出し、その答辯の如何に依つて是非を判定した。丁度この處に於て人は茲に彼が「民衆」といふのは、(從來全く見遁されてゐた所であるが) 若干の小なる資産と投票權とを有する有識中產階級、所謂現代の通用語の「ブルジョアジー」と呼ばれる民衆の部分を意

味するものであることを知るのである。ミシェルトが無知の労働者や細民に對して重きを置かなかつたことは彼が國王や貴族や僧侶に對して關心しなかつたのと同様であつた。ミシェルト及びその同時代の人々がルーテルに於て推稱した一事は、

正に彼をして充分なる報酬を得んが爲に日々の業務を忠實に行ふ處の模範的夫たり家長たらしめたアルジヨア道徳であつた。彼は亦確言する、ルーテルの悅は「心情の悦、人間の悦、家族及び家庭の無邪氣な幸福である。如何なる家族がより神聖であるか、如何なる家庭がより純粹であるか」と。

然し又彼は、ユグノー派はその時代の共和論者であり、「ルーテルは自由の回復者であつた」といふ考を幾度となく繰り返して述べてゐる。「吾人が今、人類叡智の此の最高の特權を充分に行使し得るのは、實にルーテルの恩恵である。此の近代思想の解放者を措いて、今余が起草しつゝあるものを出版し得る権利を誰に感謝すべきか」と。ミシェルトは彼の殆ど比類なき修辭法を以て改革者を最上の偉人たらしめしのみならず、又その反対派

なる非改革論者やジェスイット教徒や佛蘭西の攝政太后カザリン・ド・メデチ等に就て、その人物を誹謗してゐる。

フルード 英國に於ける自由主義はフルード(Froude)の著作に於て完全に代表されてゐる。彼の「ウールジーの没落より無敵艦隊の壊滅に至る英國史」(The History of England from the Fall of Wolsey to the Defeat of the Spanish Armada)は苦心した研究の結果であり、物語の如く読み易く、正に英國の新教中產階級の偏見を刻める著作であるが、忽ちにして轟くが如き名聲を博したのである。彼は新教が敵を作つたことのために之を愛し、又それが穩健なる合理論であつたが故に好意を寄せた。彼の考ふる所に依れば、改革者等が勝利を得たのは眞理を以て武装せるが故で、眞理とは虚偽に對する良心の反抗であつた。又「魔法と妖術の仲間に過ぎず、當時「火刑柱、拷問臺、絞首臺、宗教裁判所の牢獄、惡魔の登位を意味した處の迷信」に對する眞の宗教のことであつた。

また英國と西班牙に依つて、當時なされた別種の

選擇こそは、前者が興隆に趨き、後者が衰頽を來した事實を説明するものである。蓋し西班牙人は嘗て「既知の世界に於て最も高貴なる最も偉大なる最も開明なる人民」であつたが、一たび偶像や宗教裁判所を採用した爲に、「彼等の智力は脳髄の中に畏縮し、彼等の筋肉は自分から束縛した手足の中に收縮した」のである、と。

自由主義者 事實上同様な見解は、尙ほ十九世紀中葉の歴史家一般に就て見られる。マコトレーは「北部の偉大な文明と殷盛とは、主として新教改革の道徳的結果に基因するのであり、南部諸國の衰頽は概して舊教の大復活に歸すべきものであることは我等の確信である」と記してゐる。此の外宗教改革を以て「文化と自由」への運動であると論じた人に、佛蘭西の學者キネー(Quinet)及びチエリー(Thierry)、英人ハーバート・スペンサー、米人モットレー(Motley)及びプレスコット(Prescott)等があるが、茲にはこれ等の人々に就てその論述を引用する餘裕がない。又、多くの哲學者すらも同様な見解を有し、カーライルはルーテルを英雄

として崇拜し、エマソンはルーテルの「宗道運動を以て歐羅巴文明の根柢であるといふ。即ちルーテルの良心は民衆の共鳴を得て、その良心を鼓舞し、その脈搏は思想となり、遂には多くのガリレオやケブレルやスエーデンボルクやニュートンやシェクスピヤやベーコンやミルトンに顯はれた」といふのである。凡て是等の論評の背景には、ヴィクトリヤ時代の宗教改革時代に對する深い無意識的同情がある。蓋し宗教改革時代の創造物たる新教や民族的國家や資本主義や個人主義は、ヴィクトリヤ時代に於て完全に成熟したのである。此の時代の穩健なる自由主義者達すらも、宗教改革時代に於て彼等が完全に承認し得た所の「安全にして健全なる」改革の精神に見出されるのである。

獨逸の愛國主義者 斯の如き佛蘭西や英吉利や亞米利加の政治的民主主義に依つて起された仰讚モデルは、獨逸の愛國主義に依つて補はれてゐる。ヘルデルは先づルーテルの愛國を以て彼の偉徳であると力説し、アルントはナポレオン戦争に於て、ルーテルが伊太利の奸策を忌み、佛蘭西の欺瞞を

恐れたのを彼の正直に歸した。これと同じ頃、斐ヒテは熱烈なる講演「獨逸國民に告ぐ」(Reden an die Deutsche Nation)の中で宗教改革を「獨逸民族の無上の鴻業」、又その「世界的意義を有する完全なる行動」であると言つてゐる。其の後、フライタハは、公衆を教育して國民的にして且つ自由なる獨逸國家を探求せしめんと試みた。彼は主として十六世紀の粉本から書いた「獨逸の歴史に於ける諸相」(Bilder aus der deutschen Vergangenheit)に於て、「獨逸氣質」(Deutschstum)及び「市民氣質」(Bürgertum)に對しては最も光彩を與へ、外國人或はウンケルに對しては暗い影を投じてゐる。又ストラウス(D. F. Straus)も、獨逸の自由主義者としてのフライタハと同類に伍せしむべくであつて、彼は改革者等を皮相的な文化を捨てへ、「より良き部分」「或は必要なる一つのもの」即ち眞理を撰んだといふことを以て辯護してゐる。

科 學 的 精 神

さて次に十九世紀の初期に於て修

普遍的法則に依つて包含されたる有效なる世界觀の發生がそれである。二世紀の間に漸次人々は、外界の事物は凡て原因結果の破るべからざる法則に支配されるといふ思想に親しむやうになつた。

が然し、人類のみは自由の意志を有するが故に例外であると考へ、従つて人間の歴史は人間の氣儘な行爲の總體から成立してゐるので、それは打算され難く、概して説明し難いものであるとされてゐた。然るに一層綿密に人類の過去を考察し、より弘く深く自然の劃一性が人類の意識に透徹するに及んで、遂に人類の發展も亦「自然的」に觀られるやうになつた。併して歴史上の各時代は獨特の性質と思潮とを有し、偉人が出て一つの傾向を作

るまでは、凡てが潮流に流されるが如くに齊しく一定の方向に向つてゐることが明らかとなつた時には、個人的な勢力は影を潜め他の勢力が優勢となつたやうに思はれた。

ヘーゲル

最初の自然的な然かも重要な歴史哲學が半神學的、半個人的形式をとつたことは全く是非もないことである。哲學者ヘーゲルは、凡

ての時代は紛々方なきそれ自からの「時代精神」を有し、各時代は或る前提の自然的否な論理的發展ですらあるといふ事實に基いて、人類進歩の支配力として觀念論を打ち立てた。歴史は精神の發展である、別言すればその觀念の實現に外ならなかつた。然して歴史の根本法則は、「自由の意識に於ける」必然的「發展」であつた。東洋人の間では一人の者が自由であり、希臘人の間では數人の者が自由であり、獨逸人の間では凡ての者が自由であることを知つた。而して、進歩の第三の即ちチュートンの階段にある宗教改革は最も大なる歩武の一つであつた。近世の特色は精神が自らの自由を知り、眞理なるもの永遠なるもの而して普遍なるものを追求することである。中世なる長い恐ろしい夜の後の、近世の黎明はルネサンスであつて、その日出は宗教改革である。ヘーゲルは此の論題を證明せんが爲に、教會の腐敗に對する新教徒の反抗は偶然なものに非ずして、必然的なものであることを知らしめんと努力してゐる。蓋し進歩のカトリック教の階段に於ては、崇拜の對象は自ら感

覺的なものでなくてはならないが、高き獨逸の水準に達すれば、崇拜者は精神と心情即ち信仰の中に神を求むべきであるからである。ルーテルの主觀主義は、世界精神の自覺を表現せる獨逸の誠實に由るものである。また彼の聖餐に關する説も合理論者より觀れば保守的に思はれるかも知れないが、彼がキリストと聖靈との直接の關係を主張したのは實に同様な精神の現はれである。要するに宗教改革の根本は、人間は元來自由なるべきものであるといふことであつて、ルーテルの時代より以後の全歴史はルーテルの主義の完成に外ならなかつたといふのである。若し獨逸系の民族のみが新教を奉じたとすれば、それ等の民族のみが精神的進歩の最高の階段に達してゐたからである。

バウル

此の哲學者の最も忠實なる門弟はフェルデナント・クリスチアン・バウル(F. C. Baur)であつて、彼は歴史を記述したといふよりも寧ろそれを演繹したと言はれる人である。彼は教會史の問題に關する範圍に於ては、ヘーゲルの述べた輪廓を詳細に補充したのである。宗教改革——彼は

此の言葉を以て不適當なりとして反対し、分派(Division)或は分裂(Schism)なる語を適用せんとした——はルーテル以前に既に充分熟してゐた前提から必然に由來すべきものであつたことを彼は示した。個人的原因は高々、遙くべからざる革命の時と所とを決定したに過ぎないものであつて、最も有力なる個人と雖も、その主張が人氣を博しなければ無力のものであつたに相違ないと彼はいふ。彼も亦ヘーゲルの如く此の運動の原因を中世の教會の腐敗から演繹し、そして又、凡て後の歴史を一五一七年に最初の波が碎けたる潮流に外ならずと考へた。而して又此の運動の眞の原理たる宗教的自治と主觀的自由とは、十六世紀の諸國家に於てのみ達成せられたものであつて、それ以後は個人に對して論理的に又必然的に當て嵌められるに至つたと彼は信じた。

ランケ ヘーゲル學派の中から最高の資格を有する未曾有の歴史家が出た。レオポルト・フォン・ランケがそれである。彼は詩的天才の特權たる思想と感情の最も高い性質を除いては、勤勉といひ

學識といひ方法といひ才能といひ一として大歴史家たるの條件に缺くるところが無かつた。歴史研究はそれ自身の目的の爲に外ならず、又道德や神學や政治やの訓戒に累はざることなく、過去を「正確にありのまゝに」物語ることがその任務であるといふのが彼の主張である。彼は個性的色彩の最も渺いものを最良であると考へ、自説を加味することは稀であつた、彼が宗教改革を論ずるに當つては「初めには歴史家、後には基督教信者」であった。彼の著述の中には傳記的色彩も乏しく心理描寫も少ない。従つて獨斷もなければ論爭的でもない。彼はヘーゲルから時代「精神」の思想を受け継ぎ、ルネサンスと宗教改革と反宗教改革の精神を見事に區別してゐる。反宗教改革(Counter-reformation: Gegenreformation)なる語は、一七七〇年に初めて彼の用ひたところであつて、それより一般に行はれて反革命の語と對象されて使はれる。彼は宗教改革の原因を、第一に宗教上の「善行」を單に因襲的に信じ行ふ無自覺に對するより深刻な宗教的且つ道徳的な嫌惡にありとし、第二

に國家に存する權利義務の主張にありとした。彼は宗教的國家の政治的權力を破壊し、その代りに「何等外部の干渉を受けざる獨立の完全なる自治國家の主權」を打ち立てた事實を、この運動の結果として力説したのは極めて正當である。更に彼は近代歐羅巴の發展に對して最も重要な影響を及ぼしたる觀念は、此の思想であるとした。然しこ九一九年以後に就ても彼の考は妥當であらうか？

バツクル　ヘンリー・トマス・バツクルはまた歴史の普遍的法則を發見せんとする新出發點をなした。彼の起點はヘーゲルのそれの如く「普遍的」なものではなく、寧ろコントの實證論に依つて解釋された如き或る極めて特殊な社會學的事實であつた。宛名を表示して無い郵便物の數が毎年同一の比率をなすといふ事實、季節に依つて犯罪の數が恒常的曲線をなして變化するといふ事實、自殺や結婚の數が食料の價格と一定の比例をなす事實などに依り、凡て人間の行爲は「少くとも集團の生活に於ては、打算されねばならず又一般的法則に歸納されねばならぬ」と論じたのである。兎に角、茲

では彼の宗教改革に對する見解のみを問題としよう。各時代の宗教思想は、その時代の一般的文化の徵表に過ぎないと彼は指摘する。従つて新教がカトリック教に對する關係は、十六世紀の小規模の啓蒙がそれ以前の諸世紀の暗黒に對する如くであるといふ。即ちバツクルに依れば、ルーテルの時代に於ても輕信や無智は勿論それは減少しつゝはあつたが尙ほ一般的狀態であつた。而してこの知的變化が、宗教的變化を促した原因であるといふ。又彼は次の如き奇抜なさうして有害な說をしてゐる。即ち彼の説に從へば又彼の言葉を用ゆれば「自然の秩序に従ひ、最も文化の進歩せる國は新教國なるべく、最も非文化的なる國はカトリック教國なるべきである云々」と。されど事實は必ずしも然らずである。全般的にみれば彼は宗教改革に對して、そは人間精神の暴動であり、啓蒙的運動であり、又民主主義的叛亂であるといふ説を持つるのである。

ハラム　宗教改革家の近代思想に對する關係に就いて述べたヘンリー・ハラムは、十八世紀の後

馳せの合理論者であるにしてもレックイ(Lecky)は疑ひもなく新學派の一員として伍せられるのが至當である。彼の「合理論の精神の起原と影響の歴史」(History of Rise and Influence of the Spirit of Rationalism)は、半ばヘーゲル派であり、半ばバッカルの説に動かされたものである。その主なる目的は、何れの神學を採用するか排斥するかに就いて理性の關係する所が如何に小なるか、又それが如何に多く全く別な理由に依つて決定された時代精神に憑據するかを示すことであつた。

彼は宗教改革の本質を、當時存したる人間精神と道徳の慣行に一致したものであると述べた。然しそれは、宗教改革が迷信から精神を解放し、社會を世俗化することに於て、他の如何なる運動にも勝つてゐると考へたのである。

gne)は、英國及びアメリカの新教社會に今日も尙ほ殘存する偏見に投するやうな近代的内包を加へ修飾を施して、新教革命の超自然的學說を復活せしめて、その爲に素晴らしき過分の成功を博した。即ち彼の著書が佛語から翻譯されて莫大な流布(1)を見たのは是等の諸國である。

デリンガー 宗教改革に對する極めて有力なる反對説がカトリック教徒デリンガーに依つて發表された。彼は歴史家としては最も神學的であり、又神學者としては最も歴史眼を備へたものであつた。彼も亦、ルーテルは、事實信仰に依つて義とせらるべきふ唯我論の傾向を有する神祕的教義を中心とする新らしい宗教を創めたものであると考へた。彼がルーテルを稱讚し、その多くの實際上の改革を承認した事實こそは、彼の反對論を一層有効ならしめた。彼が羅馬と斷絶した時に彼は新教徒とならなかつた事は注意すべきことである。(未完)

(註一) 一八四八年のイギリス版の序文にはフランスに於ては一八三五年以來四千部しか賣れなかつたのに、イギリス及びアメリカに於ては十五萬乃至二十萬部が賣られたと揚言してゐる。

紙數に限りあれば、宗教改革に對する此の時代の新教徒の主たる辯護者に就いては、只その名前を記するに止らざるを得ない。リチュル(Ritschl)は古い「眞理」に對して多少新らしき見解を與へたが、それに反してメルル・ドービヌ(Merle d'Aubin)